新同人雑誌評

【同人雑誌募集】発行ごとに「三部」、左記の宛先までお送りください。
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学内
三田文學編集部 新同人雑誌評 係

佐々木義登

田中さるまる「人はいない」（「ココドコ」2）はかつて視線恐怖症に苦しみ、その後も他者と交流することができない僕と、不特定多数の男性と毎日のように肉体関係を持つ愛莉との関わりを描いた物語です。主人公は女性を尾行することで空疎な内面を埋め、愛莉は性欲を満たすことでアイデンティティを保っています。そんな二人が次第に接近してゆきます。私たちが何気なく見ている町の風景や、日々交わしているコミュニケーションを相対化して描くことで、その無機質さが際立ってくるのが印象的でした。終盤に至っても僕が抱える闇は深まるばかりですが、愛莉が彼の存在をありのまま受け入れる様子にかすかな救いを感じました。また尾行や盗聴の場面が克明に描かれており、現代社会がはらむ危うさをリアルに浮かび上がらせているのも本作の特徴です。

遠藤昭己「女神の庵」（「海」第103号）の主人公植村は神主です。ある日遠縁にあたる屋代友子から祖父と祖母の慰霊祭を行うよう依頼されます。植村は彼女の依頼を受けますが、祝詞を上げる関係上、親戚筋の屋代家について知識を得ようとしたところ友子の祖母が痴情のもつれから浮気相手に殺害されていたことを知ります。それに付随して謡曲「葛城」が物語に重要な役割を担いはじめ、後半は夢と現実が交錯しながら祭式の場面へと進みます。複数の異なったストーリーが織り込まれることで小説に奥行きと深みが出ていました。成熟した大人の読み物として高い完成度を感じた作品です。

衣奈響子「煩い風」（「樹林」Vol.674）は主人公私が偶然スーパーで出会った老人と中年男性の親子と奇妙な関係を結ぶ物語です。老人から息子の話し相手として雇われた私は次第に彼らとの関係を深めてゆくのですが、老人の再婚話をきっかけに契約を打ち切られてしまいます。実は父親である老人も主人公も、息子の内面と向き合っておらず、息子にとってストレスの種でしかない様子が巧みに表現されていました。それだけに路上で言いがかりをつけてきた輩に対し、息子が正しい所作でラジオ体操第二をし続けるラストは、あらゆることが不誠実な作品内にあって痛ましくも美しく読者の胸に迫るのでした。

小田島比呂「家族会議」（「北の文学」第82号）は全てにおいて家族会議で決め事をする父母娘四人家族の元旦の会議の模様が描かれます。父親から語られたのは両親の偽装結婚と、娘ほど年の離れた女性を妊娠させたという事実、さらにその女性を家に招くので娘たちから事情を説明してもらいたいという内容でした。両親の秘密が次々に明かされ、父親の威厳が失墜する様子がコミカルに描かれます。

加藤有佳織

田中さるまる「人はいない」（「ココドコ」2）は圧倒的な読み応えのある作品でした。冒頭、語り手の上野博士は電車で見かけた女性を尾行します。彼の「好きな一人遊び」で、この日も自分なりのルールに従って追うと、彼女は男性とラブホテルへ入っていきます。戸惑いつつ、彼は盗聴マニアを装い女性を待ちます。出てきた女性はひとり帰路につきますが、好奇心を消すことができない語り手は、ルールを破って彼女を自宅まで尾行するのです。こうした描写に語り手の為人も巧みに織り込まれ、彼は周囲の「視線」が生む不安や恐怖と向き合っていることが分かります。愛莉というこの女性は、日々尾行する彼を勤勉な盗聴マニアと見込み、自分がホテルにいるあいだ盗聴し、危険があれば助けてほしいと提案します。自身の欲望を周到かつ快活に満たす彼女との関わりは、語り手の日常に変化を生みますが……。視線恐怖症の彼が人波のなかを進む場面が複数あります。人を避け「目に入るものを片っ端から言葉に変換してゆく」ときも、そうできないときも、彼が見る情景には壁が迫るような圧力があり、息が詰まります。

河野龍希「大人は知らない」（「富士見坂から」Vol.2）は小学二年生の唯人の物語です。夏休み明け、担任教諭が「生き物の良さ」を共有するためメダカ三匹のいるガラス鉢を持ち込み、唯人はその世話係に立候補します。自分の居場所を持つうれしさとメダカへの愛着を知った彼は、給食のシシャモを食べられません。メダカを世話するのと同じく「シシャモさんたちの命を大事にいただく」よう担任に諭され、どうにか飲み込みます。数日してメダカが一匹死んでしまい、クラスの中心である大和と乃愛に責められます。担任がとりなして三人で世話することになりますが、二人に居場所を奪われると感じた唯人は、メダカを「大事にいただく」ことにします。子どもたちの力関係を描くとともに、唯人が担任の視線や言葉をじっと受け止める様子を鋭くとらえており、タイトルも秀逸です。

縣ひとみ「さようなら」（「樹林」Vol.674）の語り手の美咲は小学生になっても話すことがありません。言葉が分からないのではなく、好きな缶入りビスケットのように並んでいるにもかかわらず「つまめない」からです。「言葉の教室」にも通いますが、たくさんの言葉が「鼻や目や口に当たって痛い」のです。変化が見られず悩む母は、娘を祖父母に預けます。祖父の言葉は「尖っていないから痛くはな」く、目の前に現れ「ぷかりと浮いている」こともあります。祖父母や学校の教員と同級生の言葉を語り手はじっと眺め、あたらしい暮らしを楽しみます。しばらくして母から缶入りビスケットが届きます。よろこぶ自分を見てう

佐々木評

いびつに変容しても切れない父娘の絆が最後に描かれ、ほどよくまとまっているように見えますが、一方で家父長制に縛られ続ける娘二人への違和感が単なる「よいお話」に回収させないのでした。

有芳凛「ｂｅｉｎｇ」（「じゅん文学」第106号）は会ったこともない伯母の遺骨と同居することになった主人公の物語です。祖母が結婚前に孕んだ娘として生まれた伯母のカヤは十代半ばで家を出て、以来親族の間では語られることのない存在でした。そんなカヤの遺言には、骨になった後五十日間姪と暮らすことを希望すると書かれていました。最初は戸惑うばかりだった主人公の心に伯母への関心が芽生え始めます。幼なじみの八尋の協力を得て伯母の骨を土に埋めるラストは読者の記憶に残る鮮烈な場面となりました。

佐藤弘二郎「魔の午後四時」（「樹林」Vol.672）は遊びに出かけた息子の強志を探しに、かつて家族が暮らしていた団地を、父の卓治が訪れるところから始まります。ウサギのミミーを連れた息子を連れ戻すだけのはずでしたが、団地の駐車場で子供たちがスケボーに興じたことをきっかけに団地の住人たちとのトラブルに巻き込まれ、最後にはクロスボウガンで命を狙われる羽目になります。一種の不条理劇ですが、平穏な日常が突如として悪夢へと変容する様子が見事に描かれていると感じました。

深水由美子「優しいお墓」（「九州文學」第576号）の三十代半ばの主人公は、オカダという愛人と空疎で自堕落な生活を送っています。早くに両親を失い、本当の居場所を見つけられずにいた彼女は、ふとしたことから祖父の墓地巡りに付き合わされることになります。自分が老い先短いことを察した祖父は、主人公に将来実家に戻ることを勧めます。祖父との関係を深めるうち、何となく実家に戻ることになった主人公の、質素でも地に足をつけた暮らしを前向きに受け止めるラストが印象的でした。

丸黄うりほ「わたしたちの、ピースオブナノ」（「樹林」Vol.672）はダンススタジオ、ピースオブナノを取材に来た雑誌クルーと、主宰者のナノ・ヒロコ先生およびその生徒たちとのもめ事が中心に描かれます。撮影された写真に納得いかず、チームの絆を前面に出して抗議するヒロコ先生に、生徒たちも加担しクルーを撃退します。しかし先生には強い自意識と同調圧力が透けて見え、また表向きは賛同している生徒たちも、実は先生に対してドライに接していたことが明かされます。風刺が効いていて落ちも明快、上質のコントを見た後のような読後感が得られます。主語をあえて「わたしたち」とした点も本作の狙いに合っていると思いました。

それ以外では**漆原正雄「鳥の名残」**（「流氷群」第63号）、**兪カニ「僕と多々見さんの進捗」**（「樹林」Vol.673）、**幸村篝「野垂れ死に」**（「八月の群れ」Vol.72）、**河野龍希「大人は知らない」**（「富士見坂から」Vol.2）を興味深く読みました。

加藤評

れしそうにする祖父母に「何かの言葉を言いたくなった」美咲は「言葉の缶の、蓋を開けてみ」ます。並んだ言葉を見つめる美咲の息づかいをよく伝える筆致でした。

甲木千絵「かみなり様」（「樹林」Vol.673）では、母の影響で仕方なく保育士となった語り手が、嘘が増えた愛海という園児を気がかりに思います。児童相談員から、タクシー運転手の父親が服役し、母親は育児放棄の状態にあると知らされたとき、彼女は「苦いもの」を感じて「本当は気付いていた」と自覚します。祖父に引き取られる愛海を見送りながら、「嘘なんかつかなくていい場所まで、どうかちゃんとたどりついて」と願います。簡潔な言葉のうちに「苦いもの」を圧縮させた語りが印象的でした。

山本佳子「わが大君に召されたる」（「てくる」28号）では、昭和十年に小学二年生であった米子が昭和二十年までを綴ります。教員の彼女は疎開しますが、軍需工場で働く姉は空襲で亡くなります。父は「なんであんなところへ」と嘆き、米子は「あんなところでない、どんなところがあったのだ」と心で問い、飲み込むしかなかった言葉が胸に迫ります。同様に、戦後闇屋として家族を養うマキを描く**舟山智恵「闇の中」**（「ぼんがら」三十九号）も鮮烈でした。

梁正志「蠅（はえ）」（「淡路島文学」第17号）の語り手は東日本大震災で妻が行方不明となった男性で、避難生活のなか病を得た彼は、二二年三月末に出なければならない仮設住宅で無為に「存えてい」ます。こたつで酒とラーメンを流し込み、ごろりと横になる彼の視界に二匹の蠅が飛び込みます。手の甲にとまったそれに「生命の息吹」を感じた彼は起き上がり、死ぬ前にせめて妻の遺骸を探し出そうと願いをあらたにします。蠅に武骨なリアリティを感じました。

深水由美子「優しいお墓」（「九州文學」第576号）は、「流れ流れて流れ着いた流れ者」のオカダに惹かれるハルが祖父の家を相続する過程を描きます。祖父はオカダの同居も提案しますが、彼にその意図はなく、ハルもまた「壊れたまんまで置いとくのが一番」と考えます。二人にはこの関係性しかあり得ないことをよく表現していました。

早高叶「風の過ぎゆく」（「樹林」Vol.672）は、愛しい人と逃げる旅路で亡くなり野辺に葬られ、誰を待っているのか忘れるほどに待ち続けた者が語る端正でうつくしい佳品でした。**鋼雅代「翔びたいヒヨコ」**（「半月　よどがわ」第10＋1号）は、冷え込む駅のホームのベンチに居合わせた者の「関わりのない」関係をやさしく淡々と写します。

漆原正雄「鳥の名残」（「流氷群」第63号）は「名残」や「余り」の着想がおもしろく、**佐々木国広「へろへろ」**（「たまゆら」第120号）や**吉中みのり「波をみてたよ」**（「樹林」Vol.672）は語りにゆたかな音感がありました。

「文學界」への推薦作●お二人の討議の結果、推薦作は、**須藤薫子「ヌマンド」**（「飢餓祭」Vol.47）、**田中さるまる「人はいない」**（「ココドコ」2）、**河野龍希「大人は知らない」**（「富士見坂から」Vol.2）の三作になりました。